第一回　丸山眞男文庫記念講演会要旨

丸山眞男の世界

隅谷　三喜男

丸山さんの専門は、政治学、政治思想史という領域でありまして、その蔵書を頂いた、というと皆さんは政治学の本かとお考えになるかもしれませんが、三万冊といわれる蔵書のかなりは政治学以外のものであります。音楽関係の本もかなりたくさんあります。蔵書には、非常に多くの書き込みがあります。ただ本を読んだというのではなくて、きちんと読んでそこに意見を書かれている、これが丸山さんの読書あるいは思想における非常に大きな特徴だというように思います。

東京大学法学部政治学科の助手になられたときは東洋政治思想史という講座に配置されました。ここで南原繁先生の強い影響を受けたことが推察されますが、それはさておき、東洋政治思想史を担当することになって、丸山さんが具体的に勉強されたのは徳川期の儒教学者―政治学者は当時おりませんから、儒教自体が徳川期における日本統治の、政治思想でありますー、その中で興味を持ったのは荻生徂徠という人物です。徂徠は一般的な言葉で言えば「開明的」な儒教学者でありました。そういう意味において、徂徠は時代を鋭く見、時代を超えて先を読むということができたというように見て、高く評価されたのでしょう。

丸山さんは政治思想をテーマにしたのですけれども、思想家を客体化してその人の理論を整理して書くとか、その人の生涯を叙述するとかいうようなことはしません。逆にいいますと、丸山さんの視野というのは特定の人の思想というものには限定されない、その人を対象にしますけれど、非常に広い視野で問題を整理していく、だから一人の思想だけではなくてそれに対応するような人とかいろいろな思想が登場するというのが丸山さんの著作の特徴であります。

皆さんがいちばん手っとり早く手にできるのは、岩波新書の『日本の思想』でしょう。この本のテーマでもわかりますように、ある時代にある思想が出てきますがその背後にある社会がどういう構造を持っているのかとか、そうした中で思想家あるいは知識人がどういうよう

な思考の様式を持っていたか、こういうことが丸山さんの非常に大きな関心事であり、それこそが本来思想を研究する者の視点だと考えていたと言ってよいと思います。ですから、この書物の中に登場する人物のうち政治思想家はごく僅かですし、文学や音楽の話も出てきます。

理性的に物事を考えている状況を展開すると同時に、それを超えて日本人としての感性的なものも対象にしながら、日本人の思想を考察するというのが、丸山さんの立場です。丸山さんが関心を持ち、その中から何かを吸い取り、自らの学の体系を豊かにしていった世界というものは、非常な広さと厚みを持っています。

□　□　□

大学の講義というものは既に先輩たちの作り上げていった理論なり成果なりを客観的に学ぶということですが、丸山さんの場合は、出来上がった思想を受け止めてもう少し新しい発想はできないか―といったもので自分の体系をつくるのではないのです。一つ一つの本を丹念に考えながら読んで、思索するのです。これなどは、どうか学生の皆さんは心に留めておいて頂きたいことです。学ぶということは、決して単に出来上がった学の遺産を理解するということであってはならない。われわれに課せられたもう一つの根本的な問題は、それを材料にしながらどう考えていくか、思索するか、です。丸山先生の書かれた著作は、皆この思索の中から出てきた作品であります。

そこで、丸山さんが口を極めて批判しているのは、開かれた精神・開かれた思想、それと開かれている精神あるいは開かれている思想というのは本質的に違うのだということです。

「開かれた思想家」というのはモダンな新しいものを受け止めて、伝統的な閉鎖的なものから自らを開いて、先駆者たちの思想を受け止め自分の思想としている人たちのことです。しかし、「開かれた思想」が本当の思想としての活力を持つか。かれは非常に否定的です。そうでなくて、「開かれている思想」でなくてはならないと考えました。いつも開かれているので、他人の説も聴くし、自分の説も開かれているものとして批判を受け改めながら対話が成立していく、そういう思想でなければだめだということを繰り返し述べております。

丸山さんが、先に述べた徂徠よりもっともっと興味を持って、広い意味のアジアにおける政治思想の対象として取り上げたのは、福沢諭吉であります。彼の「開かれている思想」を高く評価したのです。徳川の末期に外国に行って、外の文化を受け入れるのですが、閉じられた新しい思想をもって人を説得するというのではなくて、新しいものに対して非常に弾力的に対応していく。そういう意味で福沢はいつも「開かれている思想家」で、明治の初期にどういう問題が起こったときにどういうふうに福沢が対応して思想を展開したかということに非常に興味を持ったのです。

□　□　□

今まで言ったことは思想にせよ思索にせよ理性の世界の事です。自然科学にせよ社会科学にせよ人文科学にせよ、理性的に客体化し、分析していく、これが今日の科学の世界です。

ところが丸山さんの本を読んで感ずるのは、丸山さんは理性だけでなくて感性を持った人だということです。それが非常に感性そのものの形をとって表れて来るのは、例えば、丸山さんの音楽に対する関心です。丸山さんの音楽評論は素人のものではありません。この感性というものを充分身に付けて学問の世界に接近をしていく、従って、所謂冷たい論理ではなくて、温かさを込めて社会現象、そこにおける人々の動きを見ていこうとする姿が非常に顕著に示されているわけです。

私たちのこの図書館が丸山文庫というものを持ったということは決して狭い意味での政治学あるいは政治思想に関する膨大な著書なり蔵書なりを頂いたということに止まるものではありません。丸山さんの本を読むことによって、新しい世界に直面し、躍動する論理にぶつかる—そこに触れることによって何かの刺激を得ることができる特別な意味を持っているものを頂いたということに我々は深く感謝をするべきであります。

（講演要旨　五月二五日　於大講堂　参加者五百余名）

□講師紹介□

本学理事、元学長（一九八〇～八八）。経済学者、殊に労働経済学という新しい学問の分野を開拓されたことで著名。東京大学経済学部の教授時代、同大学法学部の丸山眞男先生と安保問題等のことに係わって一緒に仕事をされて以来の交流があった。

〔『東京女子大学学報』五三九号、一九九九年七月号所収〕

隅谷三喜男先生と丸山ゆか里氏（丸山眞男氏夫人）
図書館一階ロビーで開催された「丸山眞男と読書」展にて